頂点を見据えて

「当時の限界を思うと、『シベリアン・カートゥル』は本当に色々な仕上りがあったと思いますよ」とスティーヴは語る。
「今が行動するときだと思えるまで、曲の発表をしませんでしたね。イエスの独創性には驚かされますよ。
メンバーは皆、以心伝心していて、曲のアレンジでも考えることが一緒でしたね。
ほとんどの時間を曲の構成やどのようにしたらベストになるのかを試行錯誤するのに費やしていました。
『これをしたらどうなるのか？この場合はキーを変えてみよう。どう展開したらいいかな？』とね」。

「同志」と「シベリアン・カートゥル」のどちらも、
大作の「危機 」よりもリハーサルスタジオで時間をかけて練り上げられただろうが、
この2曲もバンドとエディ・オフォードによってスタジオで念入りに制作されたのには違いない。

「50年前のことなので正確には覚えていませんが、すべての曲が綺麗にまとまっていたのは確実です。」とエディは語る。
「だいたいどの曲もまとまっていましたね。『シベリアン・カートゥル』についてはそこまで言えませんがね。
確か1テイクして、ビルかクリスのどちらかが2回目のヴァースで気に入らないところがあったんですよ。
『そうだな、それなら、ここからやってそこからこうしていこう』って話したら違うものになって
『やっぱりここからやるよ。』って言い出したり。曲としてはまとまっていたけど、なんかこれじゃないって感じです」。

「『シベリアン・カートゥル』はかなり面白い曲ですよ」とスティーヴは説明する。
「テーマから始まってリックが続く。私がギターに戻ってくると即興でだーっと弾く。
スチールから始まって、音質も何種類か混ざっているんです。本当にいいです。

『シベリアン・カートゥル』は非常に複雑な曲なので、いっぱいリハーサルしましたよ。
70年代はリハーサルが中心だったんです。
リハーサルで作った曲を発表して、いい曲だってみんなを納得させないといけなかったんですよ。
ジョンと私が一緒に曲作りしていた時はよかったですね。
だってそうしたら『いいや、これはいい曲だ』って賛成するのが2人になりますからね。

【写真】アラン・ホワイトとクリス・スクワイア、クリスタル・パレスのリハーサルにて、1972年9月2日、ロジャー・ディーン撮影

『危機』でエディとイエスが作り上げた独特の音楽はコンピューターやプラグインが誕生するずっと前に作られた。
「当時は全部工夫するしかなかったんですよ」とエディは語る。
「自分たちの手で音を創り出さないといけなかったんです。何でも叶えてくれる箱やそんな便利なものはありませんからね。
本当にいろいろ創り出さないといけませんでした。
『シベリアン・カートゥル』は、マイクをアンプに繋げて、それから助手のエンジニアさんに別のマイクを持ってもらい、
だいたい4～6メートルのマイクケーブルに繋げて部屋中マイクを振り回させたんですよ。
するとマイクがアンプの前を過ぎたり戻ってきたりするじゃないですか。それがちょっとドップラー効果みたいになったんですよ。
収録した2つの音源を合わせると、アンプに近づくとピッチが少し高くなり、遠ざかると低いピッチになりました。
面白かったですよ。レスリースピーカーにギターやボーカルをつないだりもしました。自分たちで工夫しましたよ。」

アルバムの最後を飾る「シベリアン・カートゥル」は初めから終わりまですさまじいエネルギーが爆発する。
そこから、この曲はこの先ずっとコンサートの素晴らしいオープニングナンバーとなった。

「レコード全体に独自のテンポとハイなエネルギーがあると思います」とビリーは話す。
「『シベリアン・カートゥル』は、エネルギーが最高でショーの1曲目に持ってこいです。本当に最高です。
レコードでも、ギターのパートがすごくかっこいいです。全てがかっこいいんですよ。
もちろんスティーヴが最高なんですが、『シベリアン・カートゥル』はギターの音がとてもよくて、リフがすごいんです。
それに加えて、クリスのベースラインがスティーヴのギターの音を邪魔をしないように入ってきてメロディーもあって、
そして2人の音がいい感じに混ざりあう。実にイエスらしい音楽ですね。

もちろん、リックの素晴らしいメロトロンや他のサウンドもあって、本当に魅力的な曲としか言いようがないです。
なんで今のようになったか分かりませんが、曲を聴くと、直感的にこれでよかったんだって分かるんですよ。
長い間、この曲がオープニング曲になっているのは当然ですね。最初のギターの入りから、ノリノリって感じですから」。

「テンポが最高なんです」とジェイは語る。
「イエスの曲で欲しいと思う全てが揃っています。素晴らしいボーカルに、素敵なメロディー、食っているリズム。
終盤に勢いのある素晴らしいギターソロもあります。
ベースラインがいたるところにあって、アランのドラムも激しく響くんですよね、あの曲の叩き方だと！ほらね。
曲の出だしからノリノリ。だから、ずっと素晴らしいコンサートのオープニング曲なんです」。
「『シベリアン・カートゥル』はアプローチが少し独特なんです」とジェフは語る。
「道行く人が口ずさめるようなメロディーなんです。キャッチーですよね。
『危機』の音楽性については、イエスの楽曲全体でたぶん本当に他に類を見ないものだと思います」。

スティーヴは、自伝「All My Yesterdays」の中で、
「カートゥル」はイエメン語で「望む通りに」の意味に近いものがあると話す。
「いいや、まさかイエメン語で歌うことになるとは思ってもみなかったですよ」とジョンは笑顔で語る。
「でも、イエメン語で歌えるロックバンドがいるとすれば、間違いなくイエスでしょうね。
私にとって『シベリアン・カートゥル』は、イエスが『海洋地形学の物語』で
これからどこへ向かっていくか教えてくれる予想図です。
終わり辺りの柔らかな曲調のことなんですが、
雰囲気のある音楽と詠唱みたいなボーカルで盛り上がっていくんですよ」。

「イエスで気づいたんですが」とスティーブは話す。
「ギターパートのシングルラインと和音パートの間にいい感じのバランスがあって、キーボードのパートも同じですね。
見事にバランスが取れています。
トニー、リック、パトリック、ジェフの誰であったとしても、バランスが上手く取れているので、誰かがリズムを保ってさえすれば、
他のメンバーはシングルラインを演奏できているんです。
他のメンバーがリズムを保っていれば、1人でシングルラインを演奏できる。話し合ってそうなるのではなくて、感覚なんです。

アルバムの中で最も神秘的な曲は、ある意味『シベリアン・カートゥル』だと思います。
実際、曲中には繰り返しが多いのに退屈じゃないですよね。なにか異質なものに押し付けられて混成されているんです。
リフがあるとすると、違う感じのバック演奏だったり、違う感じのアレンジが加わるんです。
それと、このレコードで何が1番大事かって言ったら、ドラムなんですよ。
それぞれのパートを見事にまとめているんですが、うちのドラムはすごいイカしていたってことを評価したいですね。
複雑でハイレベルなドラムなのに、目立ち過ぎた感じじゃない。
ただバンバン叩くだけじゃなくて、みんなをまとめる力、生命力がありました。
ジェームズ・ブラウンのレコードみたいに、何かあるんだけどはっきり何か言えなくて、でもそこにひっそりある感じで。
突き動かされるというか。自分のリズムを突き動かしてくるんです。ビルは本当にそれが上手かったんですよね。
他人を自分の音に巻き込むのに激しく叩く必要もなかったんです。
一緒に演奏したことがある中で、ビルは最高のドラマーの1人ですよ」とスティーブは話す。

【写真】『危機』のソングブックに掲載、歴史的なクリスタル・パレスでのパフォーマンスにて、ロジャー・ディーン撮影
【写真】アラン・ホワイト、クリス・スクエア、リック・ウェイクマン、クリスタルパレスボウルにて、1972年9月2日

「彼は妥協しない性格や他とは違うところもあったので、それに困ったときもありましたよ。
クリスがもう少しビルに寄ってほしいって言ってもそんなに譲歩しなかったんです」とスティーブは続ける。
「ちょっと寄っても、いつも『なあ、そうやってほしいっていうならこうやってやるよ。譲歩だぜ』って。やり方を考えるんですよね。
2人でビートについて結構言い合いしていましたよ。

それに、『シベリアン・カートゥル』の曲全体を通るリフはもちろん、ビルが考えたんですよ」とスティーブは話す。
「私がすごく気に入って弾きたかったんです。結局曲のほとんどで私が演奏することになって、最高でした。
素晴らしい曲ですよ。同じパートでも、状況、環境が異なります。ビルのリフは色々なアレンジとすごくしっくりいったんです。
ビルの音楽を発展させて演奏したんですが、ビルもどんな感じで演奏したらいいか示してくれました」。

【写真】ジョン・アンダーソン、スティーヴ・ハウ、当時のマネージャーのブライアン・レイン、リック・ウェイクマン

ビル・ブルーフォードは高度なドラム演奏に加えて曲作りにも貢献し、
90年代に復帰するまでイエスとの最後のスタジオアルバムとなる今作でイエスに残せるすべてを捧げた。
その時、絶好のタイミングで登場し、イエスが増え続ける熱狂的なファンに『危機』を届け、
より大きなホールを観客と響き渡るサウンドで埋めるのを手助けしたのがアラン・ホワイトだった。
アランは、一度もテンポを乱すことなくその後何十年にもわたりロック界で最も偉大なリズムセクションの要となった。

アラン・ホワイトは後に『トロントの平和の祈りを込めて』になったコンサートで他でもないジョン・レノンの「イマジン」、
さらにジョージ・ハリスンの『オール・シングス・マスト・パス』にでドラムを叩き、当時既にかなり名の通ったドラマーだった。
また、『危機』のレコーディング中、エディ・オフォードとルームシェアしていたのだ。

「イエスに初めて会ったのは、イギリスのシェパーズブッシュにある小さな服屋の地下で
リハーサルをしていたときでした」とアランは話す。
「エディとそこに行くとちょうどリハーサル中で、明らかにビルとの間に何かありましたね。ビルが早く上がらないといけなくて、
そこでエディが『アランにやらせてみてくれ』って言ったんです。
その曲が『シベリアン・カートゥル』だったんです。当時私は自分のバンドで活動をしていて、
違うリズムのジャンルだとか色々なのを演奏していました。そういったドラムに力を入れていたんですよ。
それでドラムに座って8ビートや7ビートをひたすら刻んで、バンドはそれでよかったんです。
そしてビルが公式に脱退した時、私のドラムがよかったからってイエスのメンバーが声をかけたんですよ」。

【写真】スティーヴ・ハウ、ロンドンの自宅にて

スティーヴは続ける。「アランはエディ・オフォードの友人だったので、頻繁にスタジオに来てつるんでいたんですよ。
何人かそういうのがいましたね。彼だけではありませんでしたが、たびたびそういうのがありました。
私たちは馬が合いましたね。ビルが脱退した時、アランがギグに入ることになり、全身全霊で演奏してくれました。
それ以来ずっと一緒にやってきていることから明らかですけれどね。
彼はたった数日の間にこれまで演奏したことがない曲をすべて覚えなくてはいけなかったんです。
ビルが早く上がらないといけない時に、スタジオでバンドメンバーと即興したかもしれませんね。
ビルは単純なドラマーじゃありませんでした。パートはあるけれど、
曲にはスタジオのサウンドや感覚があるってことを感じ取れたからです。
ステージにあがると、違った演奏をすることもあるんです。アランとクリスはそうするのが好きでしたね。
所々大きくするのが好きだったんです。
アランは非常にしっかりしていて、能力があり、そういう変化にも対応し、彼のキャリアを通してイエスにいてくれました。
本当に驚くべき偉業ですよ。アラン・ホワイトは、素晴らしくやってのけてくれました。
特に『ドラマ』に至るまでのアルバムでアランがやってくれたことは高く評価しています。
あのアルバムは特に素晴らしい作品になりましたね」。

「アランと私はとても親しかったんですよ」とエディは話す。
「他のアルバムを一緒に作ったこともあったんですが、彼の演奏は本当に、
何というか大部分の人にはない情熱をドラムに対して持っていたと思います。
アランと私はロンドンでとてもいいアパートをルームシェアして、1、2年ほど一緒に住んでいました。
ビルが脱退したときに、バンドでドラマーを探していて、『なら、アラン・ホワイトにお願いしてみよう。
彼、本当にいいドラマーだから』って言ったんです。彼はどちらかというと「感じる」タイプのドラマーだったので、
全ての曲やアレンジなどを覚えなければいけませんでした。
ツアー中、一緒にスタジオテープを聴いて、そのあと覚えないといけないミックスや曲を全部おさらいするんですよ。
アランは本当に呑み込みが早く、とてもよくやっていましたよ。
彼の『スターシップ・トゥルーパー』やそれ以前の演奏はまさにパワフルでした。
全ての曲を覚えることは、途方もない課題だったと思います。とてもしんどかったと思いますが、上手くやっていましたね。
彼は、ただただ素晴らしかったです」。

アランが続ける。「ジョー・コッカーとのツアーが終わったばかりでローマにいたんですが、
その時トニー・ディミトリアデスから電話がかかってきて『イエスが君のことをバンドにほしがっている』と言ってきたんです。
ちょうどその夜にツアーを終えたところだったので、イギリスに飛行機で戻り、エディ・オフォードのアパートで話合いをしました。
その当時エディとルームシェアしていて、イエスにはエディのつてで何回も会ったことがありました。
クリスは、ロンドンのレインボーシアターで演奏する私を観たことがあったようです。
それで、クリスとジョンがエディのアパートに来て、『いいか。バンドに入らないなら、この3階の窓から放り投げるぞ！』って
言ったんです。

バンドに入ってほしいって頼まれたのはいいのですが、
その数日後にダラスで1万人規模の公演があるっていうのを伝え忘れていたんですよ。
習得しないといけない曲がたくさんありましたね！
アルバムを何日間もほとんどぶっ続けで聞き通し、初めてステージに立つのがとても不安でした。
ですが、最初の夜は最高でした。ライブは上手く行きましたよ」。

「アランのアプローチは、ビルとは大きく違うんです」とビリーは話す。
「幼少期にドラマーの影響を受けている私としてはもちろん、ビルと彼のやっていることが大好きでした。
イエスにいなくてもビルの大ファンですよ。彼のクリムゾンでの演奏やソロ活動でしてきた全てのことも含めてね。
ライブでのアランを知ったきっかけは『イエスソングス』を見て
『すごい！待ってくれ。全然違うじゃないか』ってなったことなんです。同じ曲だけど、何かとても違う部分があるんです。
新しいエネルギーが巡っているようなね。

その多くが、アランの素晴らしいドラムがもたらしたものだったんです」とビリーは続ける。
「そのお陰で、その後の方向性が変わりました。イエスのライブで、本当に大事な部分なんです。
『イエスソングス』を見て、私の考えは大きく変わりましたね。
アランとクリスのこのリズムセクションは、まさにレベルが違うんですよ。ただ単に、ドラムを叩いているというだけじゃないんです。
作曲したものを演奏しているけれど、そこに彼のタッチやフィーリング、感情を込めていて、
その結果違うものが出来上がっているんです。2人の明確な違いは、そこだと思います。
2人とも、一流のトップクラスのドラマーです。でも、面白いことにドラマーは扱いにくくもあるんですよ。
ずっと素晴らしいドラマーと肩を並べて演奏できて、本当に恵まれていると思います。
そういうドラマーと演奏していない時って、　何かが違っていて上手くいってないんですよね。
アランが加入して、突然魔法にかかったみたいに上手くいったっていうのが、イエスたる証ですね。
イエスは、バンドに加入した人たち、関わってきた人たちみんなが
バンドの音楽を別の次元で高めていってくれたってという点で、　とてもラッキーなバンドです。大切なことだと思います。
アランの演奏は、パワフルでダイナミックで、全体的なパワー感によって、風景が一変したように感じられました。
本当に素晴らしいですね」。

「バンドの音が一変して、正直なところ、それがさらにハマるきっかけになったんです」とジェイは話す。
「アランの感性、激しさ、パワーはすごくいい。彼はキックとスネア間のスイングも今までとは違うやり方をするんです。
あの岩みたいにブレないものにもそれ以上のものがあったんです。
実際にそれがどんなだったかって、クリスとトニーが話していたことを聞きました。
本当に面白いですよね、自分に非常に大きな影響を与えた創造力溢れる伝説的なドラマーの2人が、
同じバンド内で確立されたスタイルを持っていたなんて。
ビルは技術的に非常に優れていて、とても鋭く、リズムに正確で、テンポが進むにつれて常に知的な想像力を刺激させる。

アランも同じように、モンスター級の技術と迫力があるんですが、感覚と勢いがまったく違うんですよ。
ドラムのキックはもっと強くなって重みが増し、それにスネアはアラン定番のバックビート。
キックのスイングにはエネルギーとパワーがあり、スネアの叩き方はビルとまったく違うんです。
私が思うに、このお陰でグループはかなり変わり、今までとは全然違う次元に入ったんです。
それがさっきも言ったように、私をもっと引き込んだんです。」

ジェフもうなずく。「アランが参加してくれたことが本当にラッキーなんです。アランならではの味をもたらしてくれた。
何百回も演奏したと思いますよ。彼は何というか、正統派なロックドラマーという感じではありませんでしたね。
とっても複雑なロックドラマーでしたから。ビルよりも、エネルギーに溢れていたと思います。
アランが加入したとき、プロのドラマーとして『危機』は演奏を引き受けるだけでなく自分の味も加えたものでした。
きっと、ライブではファンが聴いたらもっとワクワクするはずです。
彼は自分の味を加え、それをさらなる高みに引き上げたんです」。

「私はずっと自分のことをイエスの"たまご"というか核のようなものの一部と考えてきました。イエスは力の中心です。
私がバンドに入ってからいろんなメンバーが加入したり脱退したりしてきました。
今も続いている状況ですけどね」と特徴的な控えめで穏やかな口調で話すアラン。
アランがイエスにもたらしたのは、タイミングよくバンドが必要としたパワーと正確さに加え、強さと安定感だった」。
以来、彼はずっとイエスの力の中心にいる。

【写真】テンポを外すことなく、アラン・ホワイトのパワーと正確さが、イエスのファンを増やしていった

アラン・ホワイトがドラムとなり、イエスは『危機』の初ツアーに繰り出した。
そしてエディ・オフォードは、イエスと一緒に『こわれもの』のツアーをしたことがあったため、
ライブでイエスのサウンドを再現できるように持ち運び可能なリグを考案した。

エディとイエスは奇跡の組み合わせのようだった。相性抜群だった。
エディは、アルバム2枚目以降、バンドの成長を助け、見届けた。明らかにお互いの魅力を最大限に発揮していたことから、
イエスと共に音楽をするのを心から楽しんでいた。
エディは、エマーソン・レイク・アンド・パーマーを含む多くの偉大なバントと一緒に仕事をし、
名プロデューサーしての地位を確立した。
だが厳しい選択を強いられれば、躊躇なかった。「イエスがこれほどまでにやってくれるとは思っていませんでしたね、
今はそんなことは考えないでしょうが。とにかく、私は考えませんでしたね。彼らと一緒に手探りで進みました。
当時、エマーソン・レイク・アンド・パーマーと一緒に仕事をすることが結構ありました。
イエスがから一緒にツアーに来てくれって頼まれた時、グレッグ・レイクに言われたんですよ。
『なぁ、もうここで決めようぜ。両方のバンドと一緒にやるなんでできないからさ』って。
割とすんなりイエスだけやるって決断できたので、そうしました。

イエスには『俺たちはエディ抜きでこの曲をライブで再現するなんてできないんだよ』って言われましたよ」とエディは続ける。
「リック・ウェイクマンは扱える限りすべてのキーボードを持っていましたが、
それでもあのサウンドをライブで再現するのはキツかったですね。
『俺たちと一緒に来てライブの音響のサポートをしてくれないか？』って言われました。
エンジニア兼プロデューサーが実際にツアーに参加してライブ音響をやるなんて前代未聞でしたが、首を縦にふりましたね。

イエスと一緒にツアーに参加したことは、素晴らしい経験でした。私の人生を変えましたよ。
ある意味、6人目のメンバーになれた感じでした。夢みたいでしたよ。ライブでのミキキングが大好きでしたね。
とても刺激的でした。すごくよかったです。」
エディはライブ音響の扱い方やバンドのレコーディング方法を考案し、
その結果、記念碑的3枚組ライブLP盤『イエスソングス』、そして同タイトルの画期的なコンサート映像が誕生した。

「私がしたことと言えば、ある時点でもしライブで録音したいなら、
会場外のトラックでライブを録音しつつ同時に会場でライブのサウンドをミキシングすることはできないので、
実際に会場で両方の作業を行うことができるレコーディング装置を開発したんです。
24トラックレコーダーがあったので、それを3つのラックケース内に組み込み、すごくいいいコンソールを持っていたので、
それも複数のラックケースに入れました。実際にライブ音響と録音を同時に行うことができたんですよ。

結構な数のライブを録音ましたね」と話すエディ。
それが、イエスの豪華3枚組ライブ盤『イエスソングス』、そして後にボックス入りCD14枚組の『プロジェニー』になる。
「問題はどのコンサートを盛り込みたいかだけでしたね。
イエスとツアーに行けば、たくさんギグをするけれどその中にはいいものもあまりよくないものもあるってことを学びましたよ。
観客は分からなかったと思うんですけど、私たちは違いを分かっていましたね。
そして中には圧倒的に魅力的なギグもありました。
それが何なのか上手く言えないのですがね。ツアーでは、音楽に魔法を宿すことがいかに大切であるかがわかりました。
スタジオでは難しいことですが、良い勉強でした。あとは、正しい曲を選ぶこと、それだけですね」とエディは話す。

『イエスソングス』はアランのイエスデビューアルバムとなる。
「バンドに入ってたったの3ヶ月で、ライブアルバムを収録しましたよ！
ありがたいことに、たくさんの人がそのアルバムを気に入ってくれ、好評でしたね。
まあ、すべてをちゃんとやらないとっていう焦りだったかもしれませんね。それでもうまくいったと思います。」

ジェイは『イエスソングス』のアルバムと映像両方のファンで、この2つを熱心に学んでいる。
「その一瞬一瞬に入り込むため、すべてに目を通すんですよ。長年演奏されてきた曲たちですよね。
だからアランと、元々曲を作って演奏した時の様子とか、曲の意図を話し合うのが大切だったんです。
ポリリズムとか、何かすごい変化とか、そういう、アランがその頃やっていたリズムの研究みたいなものがあったりしてね。
【写真】ロサンゼルス・サンセット大通りにある看板でのアルバム『危機』のリリース告知、ロジャー・ディーン撮影

それが曲の中で聴こえてきて、アランが『そう、そこ。それを考えていたんだよ』って言うのでなるほどって理解できるんです。
ライブパフォーマンスとなると、それぞれ自由に演奏して楽しみ、色々なアクセントをつけて、
ただとっても楽しんでいる様子が分かります。
レコード版と膨大な数の異なるライブレコーディングを何年もずっと聴き、
そしてそのスピリットを表現するためどうアプローチするか決めるんです。
自分の色を添えつつできる限りレコードに忠実に演奏するよう全力を尽くしながらね。
長年こうして一緒にやってきたので、今はとてもやりやすくなりましたよ。」

イエスがスタジオで作り上げた『危機』の音楽はステージ用に翻案され、その後何年もライブショーの目玉曲となった。
イエスはメンバーチェンジが激しいことで知られ、何人も加入・脱退を繰り返してきたが、
それぞれのメンバー構成で独特の化学反応を起こしてきた。
そして、『危機』に収録された比類なき楽曲に挑んできた選ばれし者たちが、
それぞれこの不朽の名作の記憶に残るユニークな演奏を生み出してきたのだ。

イエスのアルバムシリーズツアーでは『危機』を順番に聴くことができる。
傑作を元々レコードにある順で演奏するのはバンドにとって非常に楽しいことだという。
「このツアーを始めたとき、『究極』、『危機』、『イエス・サード・アルバム』をやりましたね」とスティーヴは話す。
「イエスではもう当たり前というか、最大級の挑戦をしたんですよ。
『ライブでアルバムを丸ごとやろう』じゃなくて、ライブそのものがアルバムだったんです！ある意味、やりすぎな考えでしたね。
ですが、メンバー全員が同じ考えだったことに驚きました。
そして本番では何度かアルバムを変えて試行錯誤したんですが、それで目標が定まりました。

『危機』は3曲しかないので、何度も止まったり始まったりするようなことはありません。実際しませんしね。
そのいいところっていうのが、もちろん無意識かもしれないけれど、
ある種の物語が語られているのを感じられるところなんです。
座って初めて『危機』を聴いたとき、『危機』『同志』『シベリアン・カートゥル』と流れました。
シアターや会場に来て、その流れでやってほしいっていう会話とか、
そもそもその必要性や欲求もなくそれを耳にするなんて、ちょっと交響的だと思いますね。
もう少し絡みがあって、その3曲が織りなすつながりみたいなものを描いているんです。
『危機』は循環する曲であり、また別のストーリーを語っていますね。
曲を演奏しているだけでなく、アルバムの親近感も同時に奏でているんですよ。
本のようであり、シリーズであり、コレクションであり、そのすべてなんです。でもそれを巧妙にやってのけている。
交響曲のように楽章もあります。

ただみんなに平等に表現してもらいたかっただけなんですよ。
みんなが同時に聴こえるようにミックスしようとしたんです。
- エディ・オフォード

「交響曲は大抵3楽章構成です。協奏曲も同じですね」とスティーヴは続ける。
「交響曲は4楽章構成も多いんですが、音楽的な姿のことであり、音楽の形のことなんです。
曲をただ演奏するのではないんですよ。それが私たちがずっとやってきたことなんです。
アルバムシリーズは私が『アルバム1つ、丸ごとやってみないか？』と言い出したのがきっかけでした。
他のバンドだってやっていましたしね。でもイエスには挑戦する強い動機があると思います。
私たちの音楽は他とは違う方法で伝えるからです」。

アルバムシリーズに初めて挑戦したのはジョン・デイヴィソンがイエスに加入して2年目のことだった。
「曲の原作者であるクリスとスティーヴが一緒にステージに立って、
アルバムで起こる様々な展開で迷わないようサポートしてくれたんです」とジョンは振り返る。
「それからかなりの部分でアランもですね。
ライブでこのアルバムをどう表現していくか決めるのに最初から関わっていた人ですから。
彼らが導いてくれることでどこを目指せばいいかいつも明確に把握でき、演奏時に強い自信と目的意識を持てました。
アルバムを通しで演奏するというコンセプトができたときは、
バンドにとって本当にエキサイティングな時間でしたよ」とジョンは続ける。
「その時はまだメンバーに入って間もなかったので、個人的には、クリス、スティーヴ、アラン、ジェフのみんなが、
シンガーとして、パフォーマーとしての私の才能に自信を感じてくれたことが、本当に感激でした。
みんながこのメンバーならどんな曲、どんなキーでも、初演の曲があったとしてもやれるって思ったことで、
すごい自信がつきましたし、とてもありがたかったです」。

「リック・ウェイクマンはキーボードという武器で勝負に出ていましたね」と『危機』についてジェフは言う。
「すべてが素晴らしいですね。大好きなアルバムです。タイトル曲を演奏するのはやりがいがありますね。
あれだけの場面転換を成功させて先に進むのは、音楽として並大抵のことではありませんから。
このアルバムは全てを変えたと思います。『イエス・サード・アルバム』は曲の集まりという感じで、
イエスの歴史からすると過激なアルバムではありませんでした。
『こわれもの』から、『燃える朝焼け』や『ラウンドアバウト』のような大曲の感じが出始めたと思うんです。
『こわれもの』からイエスの曲が大きくなり始めたんです。
あの頃はまだ手探り状態でしたが、すべての道はもっと大きく、もっと壮大なものへと向かっていたんだと思います。
そこでアルバム『危機』がはっきり浮かび上がってきたんです。
何よりも個人の力だけでなく、バンド全体の力を示すものでもありました」。

「クリスのように、あんな風にメロディックなベースラインを弾く人は他にいませんでした」とビリーは話す。
「他のベースプレーヤーもメロディックな演奏はしていましたが、クリスはどういうわけか、
特にあのアルバムでは新境地に達していましたね。
もちろん、演奏されているすべての楽器、スティーヴの演奏は他に類がなく素晴らしいですし、
リック、ビル、そしてもちろんジョンのボーカルも最高でした。私にとって全てが、本当に他に並ぶもののないアルバムなんです。
とても特別で類をみない作品として際立っているんです。

『危機』は本当に色々な特別が詰まったものなんですよ。
だから、『危機』のアルバム曲を演奏する度に、
スティーヴが『同志』のハーモニクスを演奏すると、ファンはみんな分かるんです。
その場の空気が盛り上がるのを感じれます」。

ビリーは続ける。「クリスを失ったとき、ベースとしてバンドに入ったのですが、
よく分かっていなくて本当にやりづらいツアーでした。
最初に頭に浮かんできたことは、『もしうまくいかなっかたら自分のせいだ』でしたよ。
数回ギグをしたら、『大丈夫、上手くいっているみたいだ』と実感しましたね。
前より慣れてきて、クリスが描いた線からはみ出ないよう色をつけながら、少しずつ、
もう少し自分の感情を込めた演奏をして別のレベルに持っていこうとしたんです。
あのパートなしではイエスの音楽は演奏できないんです。神聖なものなんです。
でもその過程で、その中でも自分を表現する方法を見つけ、折衷したものを作ろうとしました。
クリスは、私がそういった部分を尊重し、バンドに貢献できることを知っていたんだと思います。そうできていると感じています。
バンドに再加入してもうすぐ8年になるなんて、信じられませんね。軽く考えてはいませんよ。
各ツアー前、家に帰ると全部徹底的にさらい直して、できる限りしっかりやれるようにするんですよ、
ファンをがっかりさせないように。それにクリスをがっかりさせないためにも、自分をがっかりさせないためにもね。
ステージに上がったときエンジン全開になれるって把握しておきたいんですよ。」

「アルバムを順番通りに演奏するのが本当に楽しいんです」とジョンは話す。
「アルバム全体を演奏していくにつれて、ファンのエネルギーと期待が高まり、バンドを前進させるんです。
そこから力をもらっているんですよ。物語を語り、その登場人物になりきるなかで、強い目的意識を与えてくれます」。

「アルバムシリーズのアプローチを本当に楽しんでいます」とジェフは話す。
「前にクリス・スクワイアとアルバムでの曲の順番について話したことがあります。
以前からよく、曲と曲の相互関係、キーとテンポの関係、曲から曲への移行が重要だと思うって言っていましたね。
アルバムの曲の順番に非常にこだわっていた気がします。『ここは少し遅くする必要がある、別のキーの後に続くんだ。
似たようなキーか、それか全然違うものを入れたほうがいい』とか言っていましたよ。
クリスは、アルバムを順番にまとめるという点を誰よりも意識していました。実際順番に演奏すると、すごく妥当なんですよ。
聴き手になれば、旅に連れて行かれる。その旅路も、そこで出逢う人たちも、何が起こるかも知っている。
でもそれと同時に、知っているという事で心安らぐ何かがありますよね。
『あぁ、よかった、次は「同志」か「シベリアン・カートゥル」をやるんだな』って。

1つの見解ではあるんですけど、それがたぶんファンが喜ぶことの1つだと思うんです」とジェフは続ける。
「『じゃあ、「同志」をちょっとやって、そうしたら「《90125》から何か演奏してみよう』とか、
自分たちの都合がいいように曲を選んでいるわけではないんですよ。
当時のファンはアルバムを聴くとき、きちんと全部通して聴いていたんです。
イエスは昔も、おそらく今も、アルバムバンドなのでしょう」。

イエスは最初から最後まで、素晴らしい曲でアルバムを作るバンドだ。
『危機』はその努力を体現している。
イエスと一緒に『危機』を制作したことについて、「本当に素晴らしい体験でした」とエディは話す。
「信じられないほど素晴らしいミュージシャン5人がいて、私は彼らが曲をまとめるのを手伝おうとしていただけ。
非常にすばらしい時間でした」。「自分たちと自分たちの音楽を心から信じていました」とスティーヴは話す。
「レコードを作るたびに、これは傑作だって、これまでで最高のものだって思わないといけないんです。
私たち5人が一丸となって信じていました。みんなが、一緒に頂点に立つんだって信じましたね。
イエスには不思議なまとまりのなさがありました。ちょっとしたバトルが繰り広げられていたからっていうのもありますね。
でもそんな中、『危機』の制作に没頭しました。

その月日はまるで日の出みたいだなと思います。
『イエス・サード・アルバム』と共に太陽が顔を出し、『こわれもの』で高く昇り、『危機』で青空の真ん中にいるんです。
あの時私たちがいるべき場所だったんです」。
"– ダグラス・ゴットリーブとグレン・ゴットリーブ（ゴットリーブ・ブラザーズ）
2022年4月・5月"